

## 海の特産資源回復プロジェクト（サワラの放流効果調査）

瀬戸内海のサワラ資源の回復をめざし、水産試験場では瀬戸内海の沿海府県と連携して、サワラの種苗生産、放流を行い、成長、移動状況などを追跡しています。

また、毎年、サワラ流し刺網の春漁期には、漁獲物に占める放流魚の割合（混獲率）などの調査を通じて、種苗放流の効果を明らかにしています。

サワラ春漁も6月で終わり、これからマナガツオの季節を迎えますが、県下のサワラ春漁の概要をご紹介します。



新鮮な岡山産サワラ

### サワラの漁獲状況

水産試験場が調査した主要漁協等における今年のサワラの水揚げ量は、東部が8.2t、西部が9.4tで、西部の水揚げ量が増えたことから前年の1.4倍となったものの、依然として低水準でした。

県内主要漁協等におけるサワラの水揚げ量(単位：トン)

漁場区分		2008年	2007年	2006年
東部	播磨灘、小豆島北	8.2	8.8	11.3
西部	備讃瀬戸	9.4	3.7	2.8
合計		17.6	12.5	14.1

水産試験場調べ

### 放流魚の混獲状況

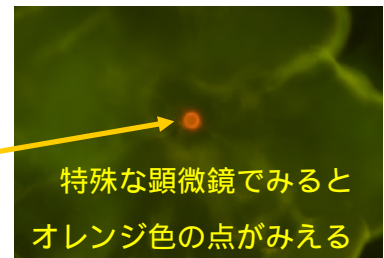
サワラの人工種苗は、アリザリンコンプレクソンという薬品を使って全て稚魚の頭にある耳石という組織を染色しています。漁獲されたサワラやその頭を、一部買い取り、頭から耳石を取り出し、染色の有無を調べて放流魚かどうかを識別します。



サワラの頭



サワラの耳石

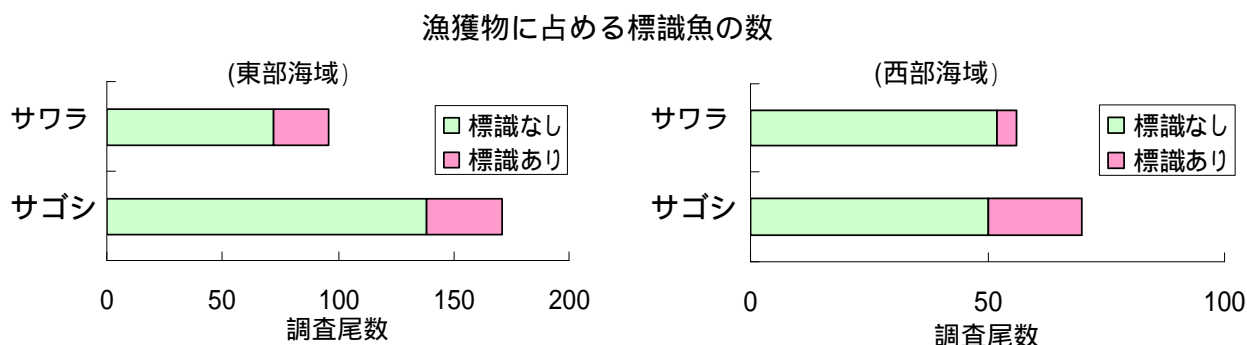


特殊な顕微鏡でみると  
オレンジ色の点が見える

今漁期の混獲率は、播磨灘、小豆島北部を漁場とした東部では、「サゴシ」（体重2kg未満）で19%、「サワラ」（体重2kg以上）で25%、備讃瀬戸を漁場とした西部では、「サゴシ」で29%、「サワラ」で7%でした。

混獲率は年によって大きな差がありますが、これは天然魚の発生尾数が多いか少ないかに左右されるものと考えられます。

銘柄別の水揚げ重量が明らかな東部では、「サワラ」が6割に対して「サゴシ」が4割でした。西部も同様の銘柄別重量割合と仮定し、銘柄別の混獲率から放流魚の水揚げ重量を試算すると、東部で全水揚げ量の約23%、1.89トン、西部ではそれぞれ約16%、1.50トンで、合計すると3.39トンとなり、これまでの種苗放流がサワラ漁業に大きく貢献をしていることがわかりました。



これまでの放流魚の追跡調査の結果、瀬戸内海東部のサワラは主に紀伊水道を經由して瀬戸内海と紀伊水道外海域との移動回遊を繰り返すことがわかっています。また、瀬戸内海の東部と西部のサワラはこれまで別々の群れと考えられてきましたが、標識魚の一部が瀬戸内海西部の燧灘で漁獲されるなど、互いに交流していることもわかってきました。

今後は、耳石によるサワラの年齢判別を行い、年齢別の混獲率を明らかにすることで、放流効果をより詳細に明らかにすることとしています。